

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日運輸省特別放承認雑誌第六二七号
平成二十五年二月一日発行(第百十六卷第二号)

ホトトギス

二月号



俳句随想 〔三百六十八〕

汀子

新聞俳壇で私は〈残暑とは秋の暑さと又違ふ〉という句を選び次のような短評を書いた。「残暑ではあるが秋の暑さではないと感じた作者」

それに対して俳句教室で教えているという方から手紙が寄せられた。「会員かち、この句は先生の善意の解釈でなく、ストリートに読めば説明句であり、どうしても戴けないと申し出がありました。私自身も常々教室で申し上げていることなので返事に窮しました。因みにその会員の句は〈何時までも異常気象や秋扇〉です」とあった。

〈残暑とは……〉の句は私にはよく分り、大変面白いと思う。

俳句は短い詩であるから、同じ句を読んでも皆が同じ解釈になるとは限らないし、又訓練によって解釈力も上ってくるものなのである。同じように理解出来ない初心者がいてもそれは当然なのである。それを指導者はどのように指導していけばよいかよく考えて欲しい。

選も又創作なりと虚子は言った。選者の選と解釈によって生きる俳句であることは選者にとって俳句の選の醍醐味なのである。

旬日記 汀子

平成二十四年二月四日 芦屋ホトギス会

紅梅の蕾は固し旅帰り
目の覚めるやうな青空春立ちぬ
明るさを集めはじめし濃紅梅

二月五日 下朗句会

雪に閉ざされし旬日語らるる
残雪を抜け来し仔細間ふ電話
寒明といふを諾ふ日差かな
残雪といへざる嵩と聞くばかり

二月六日 ロイヤル俳壇

雨も又春待つ心うるほせし
一点の主張を色に寒椿
出逢ひあり二月礼者の心もて
寒椿大地の命覚めはじめむ
春を待つ心みなぎりゆける雨

二月九日 清交社

気を許したるに忽ち冴返る
日の射してここはいぬふぐりの径
薄氷の消えゆく光置きそめし
冴返る朝の目覚めでありにけり
冴返る朝より仕事励む日に
いぬふぐり我が学舎は丘の上

二月十日 工業倶楽部

あなどりてならぬ明るさ冴返る
ふとテラス濡れてをりしと春時雨

二月十一日 ホトギス社吟行会

日裏の黄光る日表ミモザ咲く
富士見えずとも屋上の春光に
打合せしてぬしことに春めける
会場の広さが春の寒さかな

二月十四日 大隈倶楽部

はかりごとパレンタインの日の内緒
早朝の空港に着き春寒し
晩闇の旅路はパレンタインの日
抜きん出て末黒の芒なりしかな

二月十四日 錦業倶楽部

残雪の富上見えて来し夜明かな
春の風邪とてあなどりてをりしこと
雪解の街より訪ね来られけり
春の風邪とも旅疲れとも言ひて

二月十五日 夏潮句会

湯ざめしてしまひしことに気づきけり
はやばやと雛も飾りておく客間
湯ざめすることなき正座五分間
顔色に湯ざめ語りてをりにけり
湯ざめして教育勅語読みをさむ

二月二十一日 有恒俳句会

日差なき日は早春のあと戻り

梅二月大きな行事乗り越えし
道塞ぐ小さき雪崩にある生活
為人ふり向けばある鳴雪忌

研究のはじまつてゐる鳴雪忌

早春の旅とて一喜一憂す
早春の星を夜空に置き初めし

二月二十一日 無名会

野良猫の少なくなりぬ猫の恋
又塀を素通りしたる猫の恋
余寒なほ夜空の星を輝かせ
太陽を一日見ざりし余寒かな
閑日の予定空白なほ余寒
風固し海より寄せてくる余寒
余寒夜へつゞき星空拡がりし

二月二十三日 きさらぎ会

鼻ぐづぐづ目尻うるうる春の風邪
食欲の落ちざることも春の風邪
稿了となりし安堵の春の風邪

二月二十四日 時雨句会

春寒の恵みの雨と思はねば
白魚の透ける数とて読めざりし
川尻の薄氷解けてをらざりし
目立たざることが目立ちて山菜莢黄
少し春めきて滞在二日目に

廣太郎句帳

廣太郎

平成二十四年二月二日 蕉心会

ハンバーガー一日目より春隣
訃報相継ぎ春を待つ心はも
冬芽抱く一枝を風が弄ぶ
案ずるは雪に鎖されたる君よ
凍滝とならずひたすら風に耐へ
彷徨へる三角池の水かな
万両の値下げ著しき色た

二月四日 芦屋ホトギス会

若布干す太平洋を友として
純白の富士を車窓に春立ちぬ
春の風邪には君といふ秘葉かな

二月五日 野分会芦屋例会

芦屋川水無き幅にある余寒
カウスター君との距離にある余寒
らふ梅の香に寄り添へる佳人かな

二月六日 はせを句会

紅梅の瑞枝に通ふ息吹かな
残雪に哀史埋もれし関ヶ原
残雪の嵩に戦く鉄路かな
通夜を出て二月礼者となりゆけり
冴返るてふお湿りでありにけり

二月七日 カトリック新聞選者吟

教会は町のシンボル初御空

二月九日 土筆会

麦を踏む古戦場てふ静けさに
凍ゆるむ今日も新幹線遅れ

梅見客景に吸はれてゆきにけり
その中の一本のみといふ梅見

二月十一日 ホトギス社吟行会

残雪の富士と思へばそれなりに
天井の竜の目にある余寒かな
屋上に富士を探せば山笑ふ

二月十三日 朝日カルチャー若草句会

香るより探梅行の歩幅かな
恋猫の声に始まる二楽章
寒明や今夜も酒が待つてゐる
君と居ることが探梅第一歩
猫の恋五十路の恋を見下して
教室に溢るるバレンタインの日

二月十六日 登高会

六甲の雪解 夙川 芦屋川
故郷へ二月礼者は虚子館へ
クロツカス空へ吐き出す詩心
献杯をしてより二月礼者かな
申し訳程度の雪解都心にも

二月十九日 虚子生誕俳句祭小句会

記念樹の梢より降りてくるしよしゆん

二月十九日 虚子記念文学館投句

白銀を発ち残雪を越えて館
うららかに鳩飛んで来るとんでくる
物芽出づ明治の薫る公園に
君が代の鳴り出しさうな堂うらら

二月二十日 廣野の会

満作や尾張の風に磨かれて
その中に金を秘めたる柳の芽
ほぐれゆく梅に公園黙を解く

二月二十一日 草木瓜会

猫柳表情変る 芦屋川
猫柳風が遊んでゆきにけり
梅が香と判る歩幅でありにけり
梅園に取り残されてゐる至福

二月二十二日 佳人に乞われるまじ

一輪といふ梅が香の気品かな

二月二十二日 目黒学園句会

残雪の富士を素通りして旅へ
青き踏む虚子生誕の日の句座へ
あをきふむ横にあなたが居ればこそ
残雪や都心の端といふ生活
猫柳水辺は風が寄りたがる
踏青や熊野古道といふ雅

二月二十五日 伝統俳句協会関東支部大会

総門の屋根の傾斜にある余寒
震災に遭ひし虚子句碑冴返る

二月二十五日 遇会

勝鶏の顔はあなたに似てるかも
新参となりて公益法人に
もう何もかも忘れたく山笑ふ

二月二十六日 野分会東京例会

余寒まだ続く喪心なほ続く
コンクリートジャングル恋猫の天地

二月二十八日 若水句会

満作に四季の動いてゆきにけり
山焼くや炎は天と対峙して
琴線に触れし一句や鳴雪忌
ホトトギス百十五年鳴雪忌
山焼くや標高二十五メートル

雑詠

廣太郎 選

初一念をそ滅びても獺祭忌 東京 内藤呈念
秋の蚊の領空にあるベンチかな 同
手踊に非ず秋の蚊払ひをり 同
動くもの見る蟻螂の動かぬ眼 神戸 山田佳乃
刃を入るるより滴りとなりし桃 同
越ゆるべき空整はず鷹柱 同
花火待つ人に夕風ゆきわたる 東京 今井肖子
切りたての尖りたてなる西瓜かな 同
盆の月声の記憶のつまびらか 同
武蔵野に親相模野に子雷 相模原 木村享史
炎帝の威に屈せざる富士を仰ぐ 同
冷酒を酌みて呈する苦言あり 同
竜宮に舞あり島に盆踊 福山 竹下陶子
流灯の人の如くにつまづける 同
恐しき出水の闇の更くるまゝ 同
女郎花かと問ふ男郎花と言ふ 熱海 嶋田一步
朝顔の数分かる日のはじまりし 同
いつの間に萩散つてをり少しづつ 同

風音を淋しと聴く夜温め酒 香川 湯川 雅
葉の間^とにまだ葉の色に棟の実 同
はぐれんとしてはぐれし歩ちちる鳴く 同
黒日傘行き白日傘追うて行く 静岡 須藤常央
穴まどひとは追ひ掛けてみたくなる 同
昼を夜へかなかな連れてゆきにけり 同
やや強き秋風心地よき砂丘 長岡 安原 葉
待宵の仄明りとも雨の空 同
山雨過ぐ残暑かき消すほどならず 同
来賓は祝辞で帰る運動会 東京 大久保白村
揚花火かつてこの地に航空隊 同
寝袋に堪能したる星月夜 同
地虫鳴く故山の麓闇深し 樞原 稲岡 長
夕月と車窓に見しが消えてをり 同
虫の声はたと止みたる誰か来し 同
ライバルの如白日傘黒日傘 徳島 岩田公次
私の知らざりし妻なりサングラス 同
ビヤガーデン何処も似たる椰子の鉢 同
水澄んで魚も睡つてゐるやうな 熊本 岩岡中正
露の野を行きてわが足跡もなし 同
露踏んで人恋しさのやうなもの 同
透明な光の浮力水の秋 東京 橋本くに彦
軍配をかへすがごとく一葉落つ 同
雨粒の中も天下の秋ならむ 同

雑詠句評（二月号より）

美 奇・千鶴子・とほ歩

眞理子・むつみ・中正

憲 明・保 佳・葉

静 龍・廣太郎

なにもかも形見となりし窓に虹 熱海 嶋田 一步

なにもかも形見となりし……句の作者、嶋田一步さんの奥様、摩耶子さんが七月十六日朝亡くなられた。

フラワーデザインスクールの主宰をされた摩耶子さん、家の設計、部屋の飾りまで心を配られたと思う。今まで何気なく見ていた斬新なインテリアは、あれもこれも彼女の考え……だったのである。「なにもかも形見となりし窓」にふと凭られた一步さん、大きな虹を見られた。窓から見える海に立った美しい虹であった。

摩耶子さんを想う虹であった。（美奇）

平成二十四年七月十六日に、最愛の奥様である大俳人嶋田摩耶子様を亡くされた作者なのである。最愛の奥様であったが故にその全てが「形見」になってしまったという表現にこの上もない悲しみが伝わってくる。そこに奇しくも「虹」が立った。何と美し

く悲しい現実なのであろう。（廣太郎）

君の死を信じたくなし月見草 我孫子 副島いみ子

解説も何もいらぬ心の叫びの句である。誰でもこの句を読んだら、黙って目を閉じて、その悲しみを感ずていれば良い。嶋田摩耶子さん、作者は、北海道以来、長い間の心の通い合う青春の句友であった。歳はいみ子さんの方が幾つか上であり、近年はそんなに度々会われて居たわけではないであろう。だから余計摩耶子さんの死は信じられないに違いない。我々が山中湖の夏稽古で虚子先生の許に集まっていた頃、あの有名な「月見草」の句でみんながびびくりした頃、作者もまた虚子選の朝日俳壇でユニークな「何笑ふ毛糸ぶつけてやらかしら」と人目をひいていた。北海道出身の女傑は、今我孫子に住み、尚お洒落で、文章に俳句に精進しておられる。そしてその句の悲しみは、惻惻と胸に迫る。（千鶴子）

この句も、嶋田摩耶子様へ対する追悼の気持を詠んだ句である事は容易に想像出来る。句友としての立場から、遣り切れない気がひしひしと感ぜられる。故人の余りにも有名な「月見草」の句に思いを託して、同じ北海道に縁の深かった縁も相俟つて、淡淡と悲しみが詠まれていて、悲しみも一入である。（廣太郎）

天地有情

佐比売野の松虫草に告げしこと	東京	河野美奇
松虫草句碑の分身ならむ野よ	同	稲畑廣太郎
朴の花祈りを捧げたる午後	同	同
苗売の声の筈となる小路	同	同
日本の空に似てきし罌雲	長岡	安原 葉
地虫鳴くここはブラジルサンパウロ	同	同
癌の妻支へ極暑を堪へ来しが	相模原	木村享史
癒ゆる目処もう無き妻と盆の月	同	同
夜なべ置きたるより眠くなくなりし	東京	今井千鶴子
庖丁の少しきしみて秋茄子	同	同
初萩をわが胸にあふれんばかり	熊本	岩岡中正
秋の風寸暇惜しむといふことを	同	同
暮れぎはのもう一騒ぎ稲雀	神戸	三村純也
湖国とは山国にして鳥渡る	同	同
大島の初島へもとび稲光	熱海	嶋田一步
海の闇はねて切り裂き稲光	同	同
山河の気凝り鎮みし白露かな	檀原	稲岡 長
秋草の一茎挿してしきり恋ふ	同	同

江戸子選

町なかの高きものみな梅雨明けて	徳島	上崎暮潮
迫りくる眉山の緑墓洗ふ	同	同
海よりの風の涼しき松原に	吹田	宮崎 正
芦屋川海までつづく虫の声	同	同
十六夜と気づかず銀座たもとほる	東京	大久保白村
手仕事の明日が納期の夜なべかな	同	同
月一つおきて疇の鶴となる	神戸	後藤立夫
東雲は鶴舞ひ初める頃の空	同	同
諷詠の心に寄れば秋涼し	宝塚	水田むつみ
旅いくつ果てたる家居地虫鳴く	同	同
遠山と語らひ菊と語らへる	箕面	井上浩一郎
人住みしむかしを香り藤袴	同	同
伏せ込みし高さを誇り葛の花	高知	橋田憲明
野の闇をひきあぐ一と木草雲雀	同	同
鴨来る松美しき岬を指し	奈良	古賀しぐれ
先陣の鴨とし大琵琶に消ゆる	同	同
参道の尽き花野めくひとところ	東京	今井肖子
朝顔の終はり休暇の果てにけり	同	同

天地有情句評

汀子

癒ゆる目処もう無き妻と盆の月 相模原 木村享史

最愛の妻との別れ。

夜なべ置きたるより眠くなくなりし 東京 今井千鶴子

ふと緊張から解かれて。

初萩をわが胸にあふれんばかり 熊本 岩岡中正

胸には既に咲き溢れた秋の花。

暮れぎはのもう一騒ぎ稲雀 神戸 三村純也

稲雀の執着。

大島の初島へもとび稲光 熱海 嶋田一步

伊豆の島々を走る稲光。

三瓶山の秋の野。

松虫草句碑の分身ならむ野よ 東京 河野美奇

朴の花祈りを捧げたる午後 東京 稲畑廣太郎

敬虔なる心に見上げた朴の花。

日本の空に似てきし鯛雲 長岡 安原 葉

郷愁。